

【新学術領域研究（研究領域提案型）】

人文・社会系



研究領域名 古代アメリカの比較文明論

茨城大学・人文学部・教授

あおやま かずお
青山 和夫

研究課題番号：26101001 研究者番号：70292464

【本領域の目的】

本領域研究の目的は、①精密な自然科学的年代測定や古環境復元によって、メソアメリカとアンデスの高精度の編年を確立し環境史を解明する、②高精度の編年をもとにメソアメリカ文明とアンデス文明の詳細な社会変動に関する通時的比較研究を行う、③植民地時代から現代まで、メソアメリカとアンデスの文明が中南米の先住民文化に及ぼした影響を検証することである。

【本領域の内容】

本領域研究は、精密な編年をもとにメソアメリカ文明とアンデス文明という、一次文明の詳細な社会変動に関する基礎的な通時的データを収集して比較研究し、環境変動、王権、農耕・牧畜、人口変動、戦争、経済、イデオロギー等の諸側面から実証的かつ多面的に検証する。グアテマラとペルーでの航空レーザー測量によって、マヤ文明のセイバル遺跡の都市全体と周辺地域及びナスカ台地と周辺地域の遺構の空間分布を広範に調査する。さらに両文明のデータから、いつ、なぜ、どのように都市や社会が変動し、広域を支配する政治体制が発達したのかを比較する。

実証的な比較文明論の研究の基盤となるのが、高精度の編年と環境史復元である。「環太平洋の環境文明史」の自然科学研究において世界標準の年代目盛を作成する上で明らかとなったのは、湖沼の年縞堆積物は蓄積性の誤差をもつという難点であり、また北半球で作成した年代目盛もアンデス地域のような南半球の低緯度では未だにデータの蓄積が少なく10数年のズレを伴うことである。本領域研究では、統計的な誤差がない年輪年代法でこのズレを修正する。本領域研究は、古代文明の詳細な社会変動を解明するだけでなく、古代文明に関する情報が、植民地時代から現在までの中南米の先住民文化に及ぼす影響も考察する。先住民と非先住民の双方が、自分たちの過去や文明をどのように評価しながら、先住民文化を描いてきたかを探る。こうして後世の人間が資源として活用する古代アメリカ文明という視点を提示し、文明の終焉という概念に再考を促す。

【期待される成果と意義】

本領域研究は、従来の世界史研究で軽視されてきた中米メソアメリカと南米アンデスという、古代アメリカの二大文明について、考古学、歴史学、文化人類学等の異なる分野の人文科学と自然科学の多様な研究者が連携して新たな視点や手法による共同研究を推進する。つまり古代アメリカ各地

の地域・時代毎の特性や詳細な社会変動を通時的に比較研究して、古代アメリカの比較文明論の新たな展開を目指す我が国初の実証的な文理融合の通史研究であり、世界的にも斬新な研究となることが期待される。

アメリカ大陸の考古学研究は地域毎に細分化されており、世界的にみてもメソアメリカとアンデスの比較文明研究はほとんど全く行われていない。さらに諸外国においても、考古学、歴史学、文化人類学の研究は専門化・細分化されて各研究分野の研究者間の交流がほとんどないために、スペイン人の侵略以前の先スペイン期から現代までの先住民の研究が通時的に論じられることは少ない。

本研究の学術的な特色・独創的な点としては、(1)従来はメソアメリカ文明とアンデス文明が個別に研究されてきたのに対して、本研究は旧大陸の文明の影響を受けずに発達した一次文明としての両文明の特性や社会変動を実証的かつ多面的に比較する、(2)北半球で確立した世界標準の年代目盛と南半球の低緯度の誤差を年輪年代法で修正することによって、古代アメリカの自然史・文明史の年代観を刷新する、(3)研究対象とする時代を先スペイン期に限定するのではなく、後世の人々が能動的に古代文明に向き合い、それを自分たちのものとして再解釈する過程に着目する、という3点が挙げられる。

アメリカ大陸のメソアメリカ文明とアンデス文明を正しく理解することにより、旧大陸のいわゆる「四大文明」に基づき形成されてきた一般的な文明観を大幅に修正できる。本研究は、世界の諸文明の共通性と多様性を再認識し、バランスの取れた「真の世界史」の構築に大きく貢献する。

【キーワード】

古代アメリカ：コロンブス以前にアメリカ大陸の先住民が築き上げた文明・文化の総称。

【研究期間と研究経費】

平成26年度－30年度
561,300千円

【ホームページ等】

<http://dendro.naruto-u.ac.jp/csaa/>
aoyama@mx.ibaraki.ac.jp